

---

# 見つけたモノ

リロリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見つけたモノ

### 【Nコード】

N9084X

### 【作者名】

リロリ

### 【あらすじ】

朝起きた僕は記憶が無い。

僕と自分を知るオンプ。

当たり前の暮らしの中、オンプは姿を消した。

そして 一山二山の末に

二人は、 僕は全てを思い出す。

だけど 二人は すでに。

記憶で生きた意思は大切なモノを見つける。

(前書き)

笑顔について今は書きたい。  
って事で書いてます。

読めば 意味が分からないかもしれないですけど それもそれって  
事で。

ここは何処だろう。

ベッドの上、右には白い棚にメタルな時計、  
左には大きな窓から斜陽が垂れている。

全体的に落ち着いた綺麗な部屋、  
まだ寝ぼけたカラダを両腕でベッドから引き剥がすと同時、

「目が覚めた？」

声の主はオンプ、というらしい少女。

彼女は優しい声と表情で続けた

「あなたのなまえは？」 最後には くすっ と小さく笑った、とても綺麗、いや可愛かった。

その笑いが自然と嫌では無かった が、僕は黙ったまま下を向く。  
そう、僕に 記憶は無い。

何処に落としたのか、何処かで拾えるのか、まず持っていたのかさえ分からない、いや持ってたんだ。

頭の端に有る記憶…

空模様さえ見えなくらいに視界にはモヤがかかっていて、  
そこで暖かい涙を頬に受けた。

すすり泣く声は、泣くなと我慢するように シャクっていて、  
思い出すと涙が出るほどに胸が痛くなった。

記憶巡りをしていると、

「ふふ まあいつか、ご飯できてるから食べよう あーんしてあげても…」

「いや 遠慮するよ まず、名前を聞くの何回目だ 僕は…わからないと」

即答したあとと言うとオンプは真面目な顔で

「だから聴くんだったもん、そうでしょ？ 思い出してるかもしれないか

ら

「そう言ってから早く来てね！」

ぱっ　と華やいで　きゃぴーんとかぴゅーん　とか　両腕をツバサの様に広げて　部屋を飛び出た。

食卓には焼き魚に山菜のおひたし　味噌汁に白米と　質素に見えて、バランスの取れた朝食だ。

「またこれか？　朝はいつもこれじゃないか」

「なーにを言うか！地球の裏側では　お腹すいたよおう　って泣いてる子供も」

「いただきます」はい　即答。

「それとも　きゃわゆいオンプたん明けても暮れても　ぬくぬくに　やんにゃんハアハアの濃厚バイキング旅行！にしま」そこで即答を「美味しいね　この魚　サバ？」

「ぶー　なんだよー　のれよー」

少し騒いだ後は　食べるのに集中。

そんな　当たり前の毎日だった。

次の朝、荒れた部屋、静かな家の中にはオンプの声は無かった。

オンプが　いない。

胸が、あの記憶を思い出した時の様に締め付けられた。

そして　家を飛び出た。

それから気付く。

オンプは　僕を外に連れて出た事がない、つまり　道を知らないんだ。

つまりそういうこと。

力の入る眉間と拳に 汗を滲ませてがむしゃらに走ると 頭に釘でも刺されたかと思う程の激痛がかき回す。

「くっそ こんな時になんだってんだよ！」

二重三重と重なる視界に 何かが割り込んだ。

頭痛は二分もすると止まった。

汗はすっかり引いていて、それよりも驚く事に 僕は引いていた。

「み 道がわかる…？」

そう。

さっき コレというモノじゃなく、もっと曖昧な感覚が割り込んだんだ。

「記憶はあつたんだ！僕はここをしってる！」

オンプに伝えたかった。

隣に、近くにオンプはいない

楽しくて明るい声もない。

ギリリと奥歯を擦らせた。

森を抜けて 湖に出た。

辺りを見渡すと、まず目に入ったのが

積み上がった衣類と、湿った衣類との二つ。

「ここだ」

呟いて息を飲んだ、そして背中に冷水をかけられた様に冷たい感覚が巡った。

衣類の前の土が崩れて、湖に雪崩れているのだ。

云々言わずに 僕は飛び込んだ。

獲物を見つけた鳥の様に、いや、寒いね、秋だよ秋。

すぐにオンプはいた 陸に持ち上げて

オンプのあまりの軽さに驚いたけど、その事は口に出さない。

「ちゃんと たべろよ…」 すぐに出たね。

「こ こういうときは人工こ ここ こけこ」

ニワトリではないつもり。

目を閉じ 口を近づけた時、

「ん… あたし…っ？ へへ つんち」

キスをされた。

「んぐ まただ ぐう」

頭痛がまた襲って来た。

今度は治りが遅く、オンプの声さえ途切れて、視界も歪んだ「デジヤブだ」

あの記憶に似ていた、いや そのままだ。

って事は記憶じゃなく、今の事を見ていたのか？

なら 何故記憶が無い 名前は何だ？

暗闇の底から聴こえるように小さく、でも確かに聴こえる声が頭に響いた

あの しゃくつた 悲しい声で

・フラット・

そして頭痛は止んだ

僕の胸でオンプは顔を埋めて、熱い冷たい雨を降らせていた。

想いがたちぼって 瞳の奥の柔らかい何かが崩れて降らせた オンプの涙。



胸が痛い、何か言わなくちゃ、だけど何を？、何も浮かばない、いや 一つあった。

「フラット。僕はフラットだよ オンプ。」

勢い良く顔を上げて、赤くなつて濡れた瞳は丸く開いてすぐまた 顔を歪ませて流した涙は暖かかった。

「よがっただあ フラットが 戻ったああ」

「うん ごめんね 大丈夫だよ だから笑つて、いつもみたいに。」  
懐かしい笑顔はそこにあつた。

ずっと見慣れた笑顔。

僕の見つけたモノ 大切なモノ

オンプと僕との 二人だけの 笑顔を

オンプと一緒に抱きしめた

離れない様に 忘れないように

冷たい涙を流さない様に

今日も明日も ずっと ずっと。

そして 二人は死んだ

いや 死んでいた

ずっと 昔に。

(後書き)

へへ 意味が分かったかな？

朝起きてたフラットは 死んだ時に戻ったんです。

それで、記憶の場所まで行って、

イベント発生！

つまりそういうこと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9084x/>

---

見つけたモノ

2011年10月25日03時07分発行